

SDC Suita Digital Citizenship



吹田市 デジタル・シティズンシップ教育通信 第1号
令和5年(2023年)3月20日 吹田市立教育センター発行



「デジタル・シティズンシップとことん見る知る リアルゼミ IN 大阪」に登壇しました!

令和4年12月3日(土)に大和大学にて、『デジタル・シティズンシップ とことん見る知る リアルゼミ IN 大阪』が日本デジタル・シティズンシップ研究会主催(吹田市教育委員会共催)で開催されました。

吹田市の取組に関する教育センターの発表に加え、2名の小学校教諭から**問題を子供たちが“自分事”として考えられるような創意工夫のある授業やお互いの意見を交換し合う中で、また新しい考えを探っていくような“対話”のある授業**についての実践発表を行いました。

GIGA スクール構想と同時に、全国に先駆けて取組をスタートし、DC教育を実践してきた本市が、第1回リアルゼミの開催地に選ばれたことは、とても喜ばしいことです。本市の取組や吹田市教諭の頑張りについて、当日参加された DC 教育に興味を持つ多くの方々に知ってもらおうとともに、他自治体の教育委員会の取組や教職員等の実践を知ることができた、学びの多い一日になりました。

なお、発表された授業の様子は、現在、経済産業省「STEAM ライブラリー」の HP で収録された動画が配信されていますので、そちらも是非ご覧ください。

講演・発表いただいた吹田市のメンバーを紹介! (敬称略)

ライトニングトーク	里 陸斗	吹田市立千里丘北小学校 教諭
	福井 将人	吹田市立教育センター 所長代理
実践発表	花谷 基	吹田市立北山田小学校 教諭
パネルディスカッション	草場 敦子	吹田市立教育センター 所長



ライトニングトーク 里先生の発表より

DC 教育の土台づくりには、ICT の日常化が大切です。どのようにしたら日常化が図れるのか。まず、①子どもを信じる! 否定的な声かけをしない、笑顔で子供に関わるようにする。次に、②楽しいクラスを創造! Teams 等を活用した Creative な会社活動等でワクワクしながら活動できるようにする。最後に、③授業の一部を ICT に置き換えてみる! 例えば、音読劇「お手紙」の言語活動を『お手紙 THE MOVIE』として動画作成に挑戦する。活動の中で起きた問題をクラス全体で共有し、解決に向けて考えることで、「立ち止まって、自分の感情に向き合い、考えて、行動に移す」といった子供たちの力を育みます。



ライトニングトーク 福井所長代理の発表より

全国の自治体に先駆けて、吹田市は DC 教育を推進してきました。DC 教育は市民教育です。児童・生徒が考え方やスキルを身につけるためには、学校だけでなく、保護者・地域・市民を巻き込むことが大切です。授業で使用したワークシートの保護者記入欄には、「気になっていた端末の使い方について子供と考えることができてよかった」等の声が寄せられていました。

今後は市民を巻き込みながら、取組の中身をさらに充実させ、挑戦を続けます。そのために、まずは対話を大切に学習者中心の「授業改善」に取り組めます!



実践発表! 花谷先生の発表より

1. 授業観と教師の役割:「教師は子どもの学びの伴走者」

「聴く」集団づくりをすることで、学びがインプットされます。また、相手が聴いてくれると話したくなるので、対話的な集団になり、学びも深まります。授業だけでなくあらゆる教育活動において、なぜするのか(Why)? 何をするのか(What)? どうやってするのか(How)? を教師も子どもたちも考えることで主体性も同時に高まります。教師は子どもたちに考えるきっかけを与え、授業において最も大切なことを導き出すために発問するという「子どもの学びの伴走者」でありたいです。



2. DC 教育の実践

①「自分のパソコンと上手に付き合うには」(2年生)

パソコンの使い方の知識や困ったこと等の経験談をクラスで共有し、みんなで考える土台を整えたいので、動画からの知識だけでなく、新たな知識から自分の考えを再構築できるように、子どもたちに問い、考えさせるようにしました。

②「ネットで知り合った人と真の友情が築けるか」(6年生)

子どもたちがこれから出会うであろう困難を解決する力を身につけるために、上記テーマで肯定派と否定派に分かれて話し合いました。肯定派は少なかったが、身近な教師の肯定的な経験を伝えることで、新たな考えや価値観が生まれ、子どもたちの考えが広がりました。

パネルディスカッション 草場所長の発表「吹田市の挑戦～『覚悟』と『責任』～」より

吹田市の教育理念を実現し、「持続可能な社会の担い手」を育てるために、子供たちが立ち止まって考える力、共感力、メタ認知力を育成します。そのために、PDCA サイクルでデジタル・シティズンシップ教育を推進していきます。

Plan (令和元・2年度):「GIGA スクール構想の実現に向けて」

GIGA スクール構想の説明を受け、「誰一人取り残すことのない教育環境になること」、「全ての子供が端末を学習道具として使用可能になること」を想定し、デジタル社会に生きるデジタルネイティブな子供たちのために、DC 教育を ICT 教育の土台に据えました。この DC 教育の研修を全教職員対象で実施するとともに、パイロット校を選定して研究推進の体制を整えました。また、GIGA 端末を利活用するための研究会を公募制で立ち上げるとともに、先行導入校を選定し、その取組を全校へ発信するようにしました。

Do (令和3年度、GIGA スクール構想元年):「学習者主体の授業をめざして」

令和の日本型教育を端末の利活用で実現するために、公募制の授業改善研究会を立ち上げ、研究推進校を選定して、学習者主体の授業づくりを目指しました。また、DC 教育推進担当者を校務分掌に位置づけ、教育センターから年間カリキュラムや指導案等を提供することで、全校で授業を実践することができました。

Check (令和4年度):「対話のある授業になっているか」

DC 教育の授業参観や学校訪問から、教師の一方的な講義になっている実践が課題として挙げられました。一方、「対話のある学習者主体の授業」が行われているクラスでは、子供が自分事として考えるための創意工夫があるため、子供たちが生き生きと活動する様子が見られました。

DC 教育のモデル授業については、SDC 通信や教育センターホームページで紹介する予定です。

Action (令和5年度):「持続可能な社会の担い手の育成へ」

現行学習指導要領に基づく授業づくりの研究会で、吹田市に授業づくりの文化を築くとともに、DC 教育の実践を継続することで、子供たちの「発信力・質問力・考える力・共感力・メタ認知力」をさらに育成し、「持続可能な社会の担い手」を育てていきます。



【編集後記】

DC 教育が今、全国で注目されており、子供たちに必要とされている力であることは間違いありません。皆さんの授業は本物の対話になっていますか。ぜひご自身の授業実践を振り返っていただき、そして、この通信が皆さんの一助となるよう願っています。いち早く、DC教育の取組をスタートさせている吹田の先生方の取組の実績を、もっともっと発信します。

(文責:小田・川添)

吹田市の挑戦

デジタル・シティズンシップ教育



HP
(ホームページ)